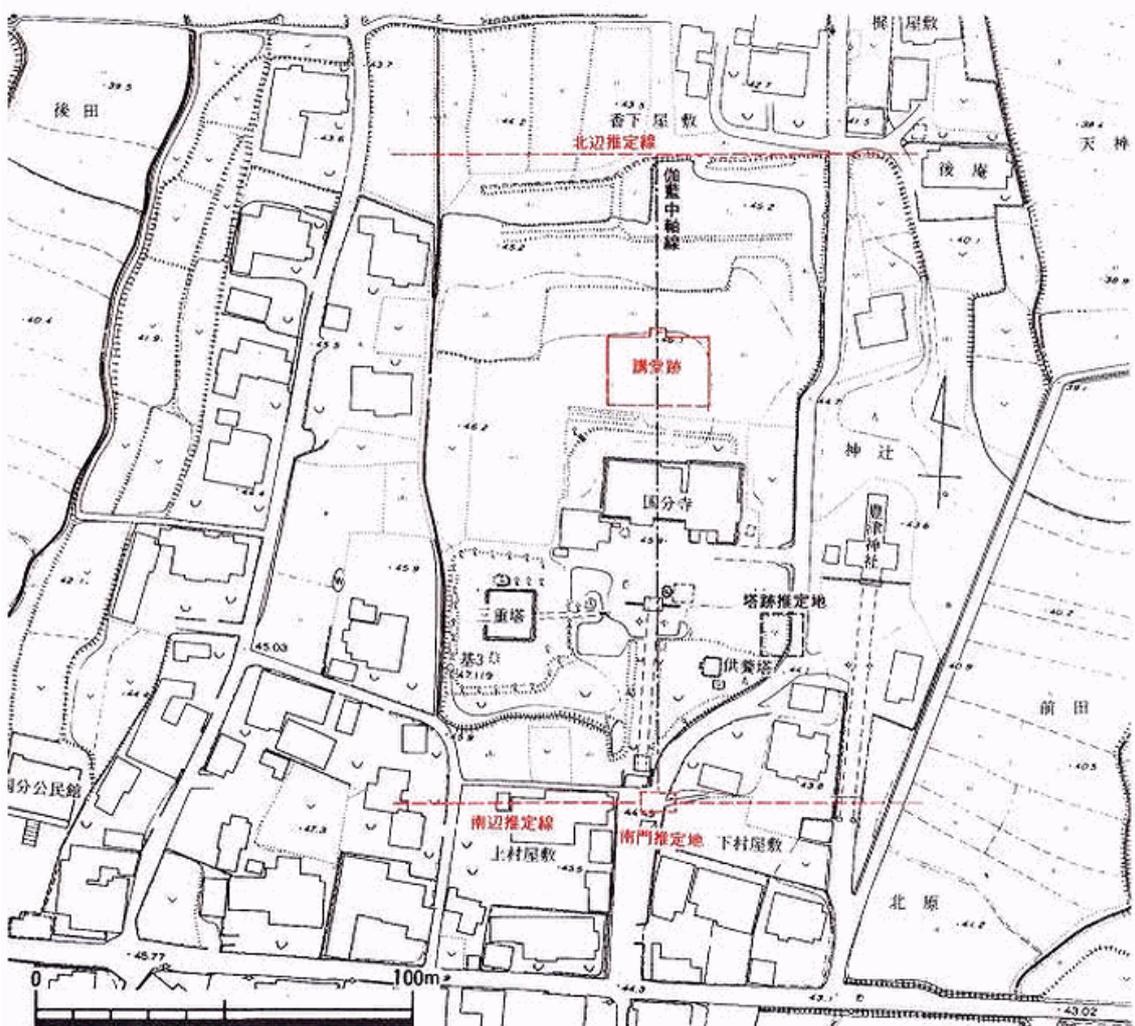


●豊前国分寺の再検討 2

<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11D0/WJJS05U/4062555100/4062555100200040?dtl=all>

で公開されている、みやこ町史の、第三編 古代(奈良・平安時代)・第三章 律令政治の展開と郷土-奈良・平安時代-・第六節 豊前国分寺の建立と移り変わりに記されている、昭和60・62年の発掘結果を踏まえて再検討する。

講堂と思われる基壇を見つけた発掘などから、豊前国分寺の伽藍は次のように想定されている。

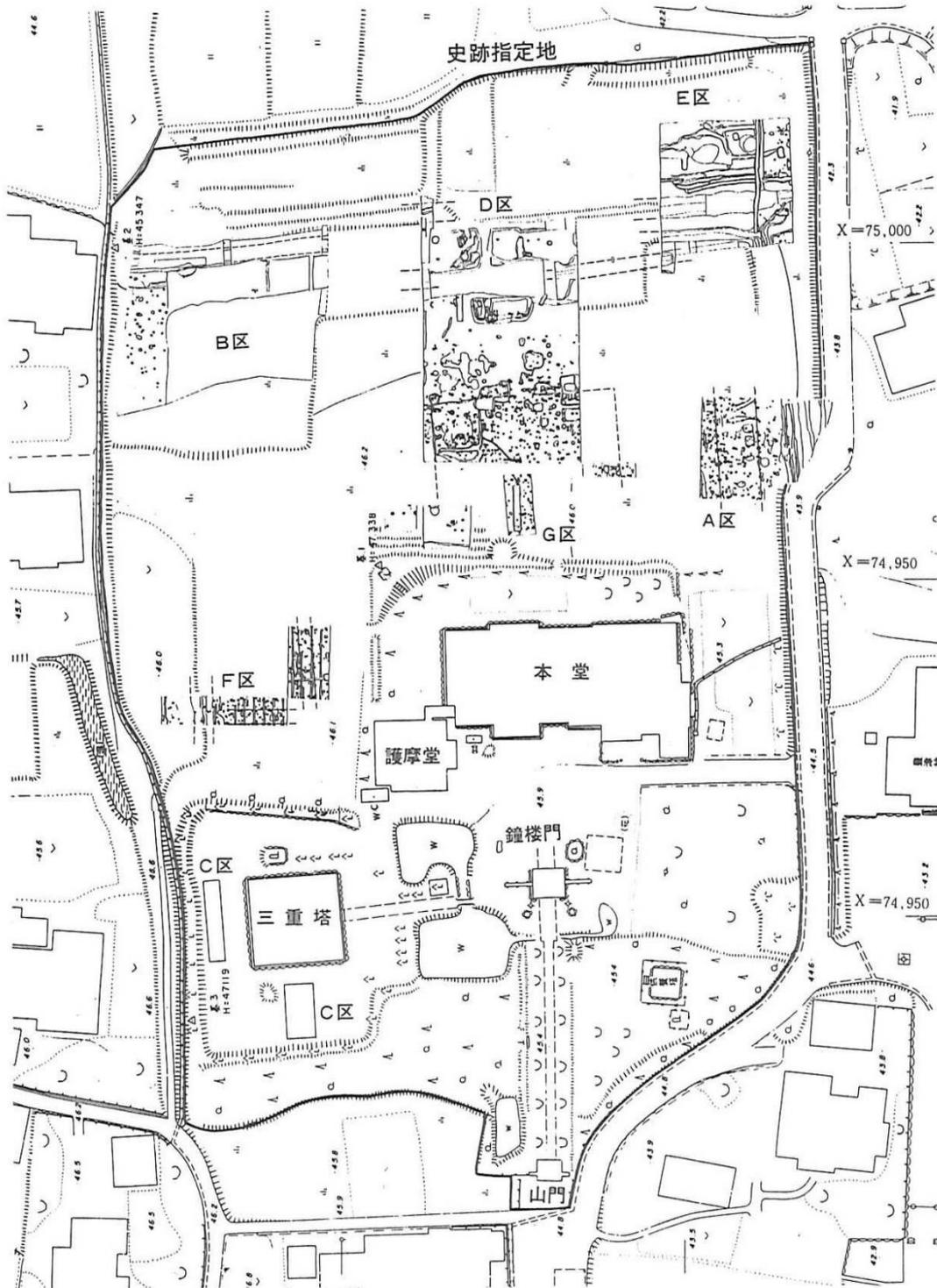


(「豊前国分寺伽藍想定図」を参照)

現国分寺の北に発見された基壇を講堂跡と考え、現金堂付近に金堂があり、その南にある三重塔が当初の塔あととしていたが、周辺の発掘からは何も出てこないので、伽藍中軸線を挟んだ東の反対側に塔があったと想定されている。

1：国分寺の確認された遺構

確認された遺構は以下の通り。



(「豊前国分寺発掘調査区配置図」を参照)

★現本堂の北のD区から講堂と思われる基壇を発掘

東西約27m。南北幅は未確認。

地山を削り出したもの。

確認された高さは0.1～0.3m。

基壇の北側に幅3.5mの階段が付く。

基壇の主軸は現在の国分寺の主軸から西側に約3度振っている。

※報告書まとめは西偏3度としているが、これは現国分寺の軸が真北と誤認しての結論。
地形図では現国分寺の軸は、磁北から東に5度偏したのもの。つまり西偏2度。

これから西に3度偏するのだから西偏5度。

これは中世のものと判断された寺域区画溝の方位と同じ。

周辺の遺物から、基壇外面に外装として磚を積み、基壇上には礎石を置いていたことがわかる。

中世の14・15世紀には破壊された模様。

★現本堂の西のF地区から

幅2.1mで南北に8.7m伸びる二条の柱穴発見。この方位は講堂と思われる基壇の方位とほぼ同じか？ 柱穴の大きさは40cm前後。

※報告書は性格を規定していないが、位置からして講堂に取りつく掘立柱式の回廊かも？

このすぐ南に幅2mで東西に8m伸びる二条の柱穴発見。柱穴の大きさは50cm。柱抜き取り孔は15～20cm。

これは何だろうか？

★寺地の範囲や伽藍配置の全体像

現在の山門の南数メートルの地点から花崗岩の礎石が一基出土しており、この位置を創建時の南門と推定。指定地北辺段落ちまでの南北の長さは約180mとなる。この敷地内に建立された七堂伽藍のうち、D区の調査で講堂の位置が明確になった。金堂は現在の本堂の位置と重複するかやや南にあったと推定されている。中門は現鐘楼門より南側、南門は現山門より数メートル南側の位置と考えられる。塔は従来、現三重塔の位置に創建時も建っていたと考えられていたが、周辺のC区の調査では創建時の遺構・遺物がまったくなかったことから、参道を挟んで逆の東側の位置について考慮に入れる必要がある。僧坊・食堂についてはまったく不明であるが、講堂の北部から西部にかけての地域に十分な空白地がある。

以上は報告書からの引用。

★**中世の寺域**については、A区・D区・F区で検出された南北方向・東西方向の溝(SD2004・SD3102・SD4001)を一連の区画施設として考えることができる。この場合、寺域の東西幅は溝の芯々で計測して約八四メートルとなる。その方位はN-約5°-Wである。

★**出土遺物のうち瓦**については、表採資料も含めてさまざまな形式のものが出土している。

軒丸瓦では、百濟系単弁八弁・高句麗系・老司系単弁一九弁・鴻臚館系複弁七弁のほかにも単弁一三弁・単弁一六弁・単弁三七弁・複弁八弁などがある。軒平瓦では、重弧文・新羅系・老司系・法隆寺系などがあり、鬼瓦は大宰府系である。これらの瓦のうち、老司系と鴻臚館系の軒丸瓦及び老司系の軒平瓦は豊前国府跡出土のものと同範である。法隆寺系軒平瓦は築城町船迫堂帰り瓦窯跡で製作されている。

2：遺構からわかる豊前国分寺

以上を総合すると

1：**創建年代** 6世紀末～7世紀初。

百濟系単弁八葉（つまり素弁蓮華文軒丸瓦）が出土しているため。

2：伽藍配置

報告書が想定するのは、南大門—中門—金堂—講堂が南北に一直線になる、大官大寺式か東大寺式。

だが、現本堂の西のF区から見つかった2.1m幅の二条の柱列が掘立柱式の回廊と考え、これが講堂に取りつく回廊と見れば、伽藍形式は回廊の中に塔や金堂がおかれる古式寺院となる。

想定される形式は、

a：中門が現鐘楼門のすぐ南で南門が現山門のすぐ南と考えれば、塔と金堂が東西にならぶ、法隆寺式か法起寺式、あるいは観世音寺式。

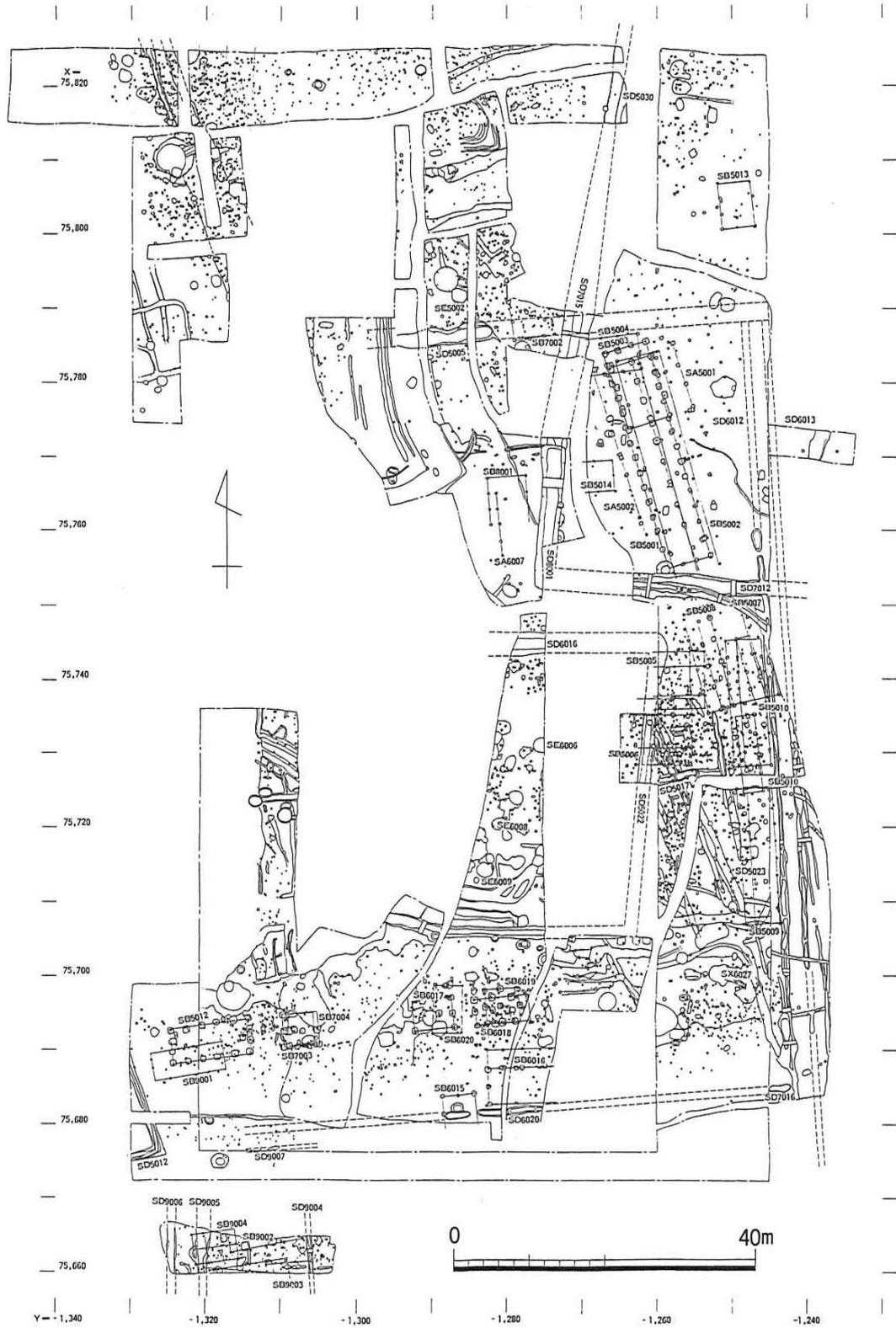
b：現山門のすぐ南の遺構が中門と考えると、中門—塔—金堂—講堂が南北に並ぶ四天王寺式も考えられる。

3：国府の発掘結果を踏まえて

<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11D0/WJJS05U/4062555100/4062555100200040?dtl=all>

で公開されている、みやこ町史の、第三編 古代(奈良・平安時代)・第三章 律令政治の展開と郷土—奈良・平安時代—・第二節 地方行政のしくみ・一 豊前国府に記されている発掘結果を踏まえて考察する。

① 発掘結果の要約



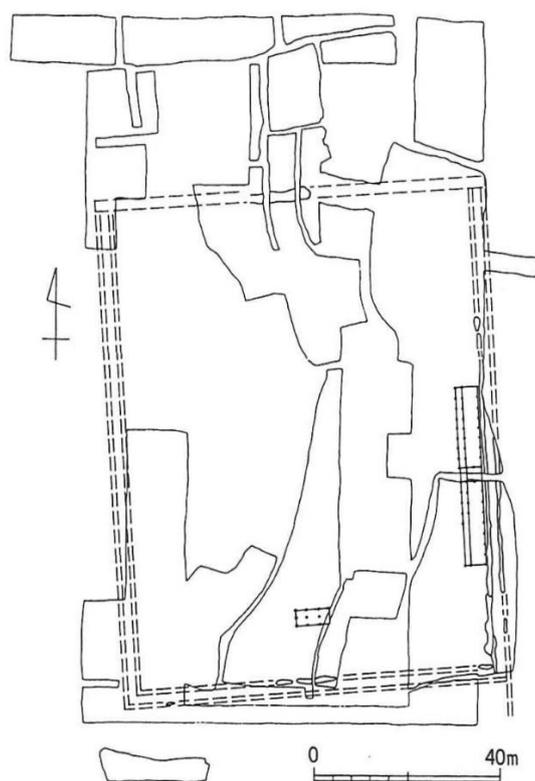
(「国府政庁地区発掘図」を参照)

国府跡は豊津町大字国作・惣社地区から発見された。

政庁の存在が有力視された国作字御所・宮ノ下地区の調査は、平成元年度(第五次)から六年度(第九次)まで継続して行われた。

★豊前国府の範囲

国府の範囲を復元すると、第Ⅲ期政庁の時期で南北の長さが約 650m、東西の幅が約 490m と推定される。



(「豊前国府政庁Ⅲ期遺構図」を参照)

★国府地区の変遷

Ⅰ期：第Ⅰ期に属する遺物は整地層・包含層などから出土しており、惣社地区と同様の集落が広がっていたことも想定されるが、政庁建設の際に破壊されたと考えられる。

Ⅱ期：第Ⅱ期の遺構は、基本的に当地区の西部に広く分布する暗褐色整地層の下から検出される遺構である。全体としてこの時期の遺構は少なく、南西部で検出された逆 L 字形に曲がる溝(SD5012)と二棟の掘立柱建物跡(SB5012・SB7003)のほか、南東部の数条の南北溝と不整形土壌が確認されるにとどまる。SD5012 は二段掘りで直角に近く屈折するが、その方向性からみて政庁を直接区画する溝とは考えにくい。SB5012 は柱穴が一辺 80～100 cm の方

形をなす、官衙的な色彩の強い東西棟の建物である。規模は桁行が五間(10.5m)、梁間が三間(4.5m)で、床面積は約 47 m²である。この時期の遺物としては鴻臚館系や老司系の軒瓦があり、一部は瓦葺き建物であったと考えられる。

Ⅲ期：この時期の施設は暗褐色土の整地を行ったのち建設している。

●この時期の基準となる遺構は政庁東辺を区画する二条の南北溝で、築地塀の両側の雨落ち溝である(第 12 図)。政庁地区南東部でこの溝から西方に屈折する一条と、南西部で平行して外側を走るもう一条の溝があり、この両方の溝の間に南辺の築地塀が想定できる。また、北辺でも同一の方位をとる大溝が確認されている。

●政庁内部の建物では東辺築地塀の中央付近に隣接して、南北に長大な同じ構造の掘立柱建物が二棟連続して配置されている(SB5009・SB6020)。SB5009(第 13 図)は北側の建物で西面に廂を持つ南北棟の建物で、桁行八間(17.4m)・梁間三間(4.90m)で、床面積は約 85 m²である。SB6020 も同様の建物であるが、桁行が 18.4mとやや長く、床面積は約 90 m²である。これらの建物は政庁の東脇殿であるが、政庁南部の中央付近で中門の可能性ある総柱状の掘立柱建物跡(SB6018、第 14 図)が検出された。この建物は東西棟で、桁行三間(6.8m)・梁間二間(3.4m)で、八脚門の形態をなす。

●以上の遺構はⅢ期のなかでも前半代に属するものであるが、これとは別にやや新しい十世紀後半の遺構もある。それはⅢ期政庁の南西部の築地塀外側で、南北に平行して走る二条の溝(SD9005・SD9006)である。二つの溝の間隔は芯々で約 4.2mを計り、Ⅲ期前半代の東辺の築地塀に比べ幅の広い築地塀が南北に通っていたと考えられる。

Ⅳ期：Ⅳ期以降になると、政庁地区には多数の掘立柱建物が建築される。調査区北東部で検出された大形の掘立柱建物群(SB5001・SB5002・SB5003)と柱穴列(SA5001・SA5002・SA5005)は、この時期に属する可能性がある(第 15 図)。これらの遺構群はほぼ同じ方位(N-17° ±1° -W)をとり、柱穴から瓦器片が出土している。SB5001 は南北棟の建物で、桁行一四間(30.2m)、梁間三間(6.0m)を計る長大な建物である。床面積も 181 m²に達する。柱穴は一辺が 90 cm前後の方形で、深いものでも 40 cm程度、浅いものでは 5 cm足らずしか残存していなかった。この建物は一回以上の建て替えが行われている。SB5003 は時期的に SB5001 に先行する建物で、桁行三間(9.0m)・梁間二間(6.0m)の南北棟の総柱建物である。東西面に入出口を持つ八脚門の可能性もある。またこの建物中軸線から連続して南方へ延びる SA5005 は、SB5003 と同じ柱間をなし、板塀状の施設であったと考えられる。

Ⅴ期：Ⅴ期の遺構では、方形にめぐる大形の溝がある。この溝は政庁地区北西部(SD5022)と中央部(SD5030)との二か所にあり、SD5030 は第二次の御所地区トレンチでも続きが確認されている。この溝は幅 2～3.5mで、断面が逆台形をなし、溝で囲まれた範囲は南北約 88mである。

★国府政庁の規模と方位

政庁はⅢ期のものが最もよく分かっており(第16図)、その規模は南北の長さ(南辺築地塀の芯から北辺大溝の掘り込み内側上場まで)105mで、幅(東辺築地塀を中門で折り返した場合の芯々で)79.2mである。また南北の中軸線はN-約4°-Wの方位をとる。

この町史の記述ではⅡ期以降が豊前国府であるがそれぞれの年代は示されていない。

奈良文化財研究所のデータベースの中の古代地方官衙関係遺跡データベースの「豊前国府」を見ると、各時期の年代がわかる。

これと先の町史の国府についての記述を比較すると、町史のⅡ期の前に、正方位の遺構が発見されてこれがⅠ期とされている。

★奈良文化財研究所データベースデータ検証

(3) 豊前国府(7世紀中葉～13世紀前葉)

遺構図を見る限り、少なくともⅢ期にわたる遺構が重なっている。建物データで見るとⅠ～Ⅳ期。

Ⅰ期：ほぼ正方位

Ⅱ期：わずかに西偏 8世紀中葉～9世紀中葉 SB5012 東西棟で9° W

Ⅲ期：わずかに西偏 9世紀後葉～10世紀後葉 東脇殿 SB5009 南北棟で4° W

Ⅳ期：11世紀前葉～12世紀前葉 東脇殿 SB5001 南北棟で16° 30' W

おそらくⅠ期が7世紀中葉以前の正方位の建物群だと思う。SB5005とSB5006の二棟の四面廂建物。ここが九州王朝時代の豊前国府。

Ⅱ期の前半、7世紀中頃から8世紀初は九州王朝時代。なんと西偏。

Ⅱ期の後半が近畿王朝時代の豊前国府。8世紀初から9世紀中葉。ここも西偏。4度。この方位が国分寺の方位とほぼ同じ。

Ⅲ期も近畿王朝時代の豊前国府。9世紀後葉～10世紀後葉。ここも西偏4度。

Ⅳ期はすでに平安末期。11世紀前葉～12世紀前葉。西偏16度。

★福岡県行橋市主催のシンポジウム「豊前国府誕生ー福原長者原遺跡とその時代」(平成29年3月4日実施)の資料

http://www.city.yukuhashi.fukuoka.jp/doc/2017041200045/files/fukubaru_sympo.pdf

を見ると、「豊前国府の成立」という岡山理科大教授の亀田修一の講演記録が掲載されている。この主張は要約すると、7世紀末～8世紀中葉とされる福原長者原遺跡が最初の豊前国府であり、国府はその後8世紀中葉以後は福岡県京都郡みやこ町大字総社にある豊前国府遺跡に移ったと考えるもの。

ここに豊前国府遺跡の詳しい説明があり、この中に豊前国府跡出土の瓦についての考察がある。

これによると、

豊前地域の百済系単弁8葉蓮華文軒丸瓦とセットをなす重弧文軒平瓦が政庁地区の南西の総社八幡社の南にある土壇で見つかっていることが指摘されている。

つまり6世紀末から7世紀初とすべき素弁蓮華文軒丸瓦が豊前国府で使われていたということだ。

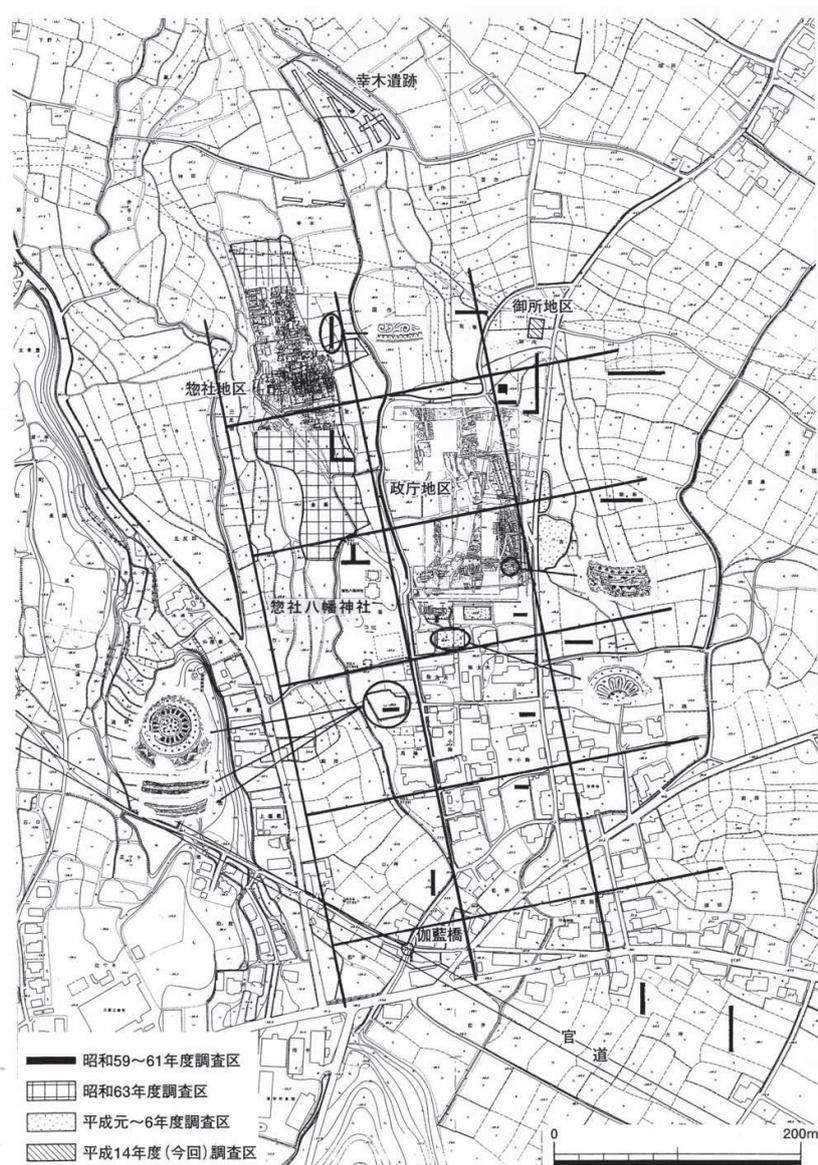


図2 豊前国府跡調査位置図・軒先瓦出土位置図(1/4,000)

(「豊前国府軒先瓦出土位置」を参照)

つまり国府遺跡のⅡ期から出土するのは老司系の単弁蓮華文軒丸瓦や鴻臚館系の複弁蓮

華文軒丸瓦であるので、このⅡⅢ期は7世紀後半の国府であることを示す資料だが、その前の正方位のⅠ期の時期が示されていない。このⅠ期の時期を示すのが、この百済系単弁8葉蓮華文軒丸瓦とセットの重弧文軒平瓦だったのではないかということだ。

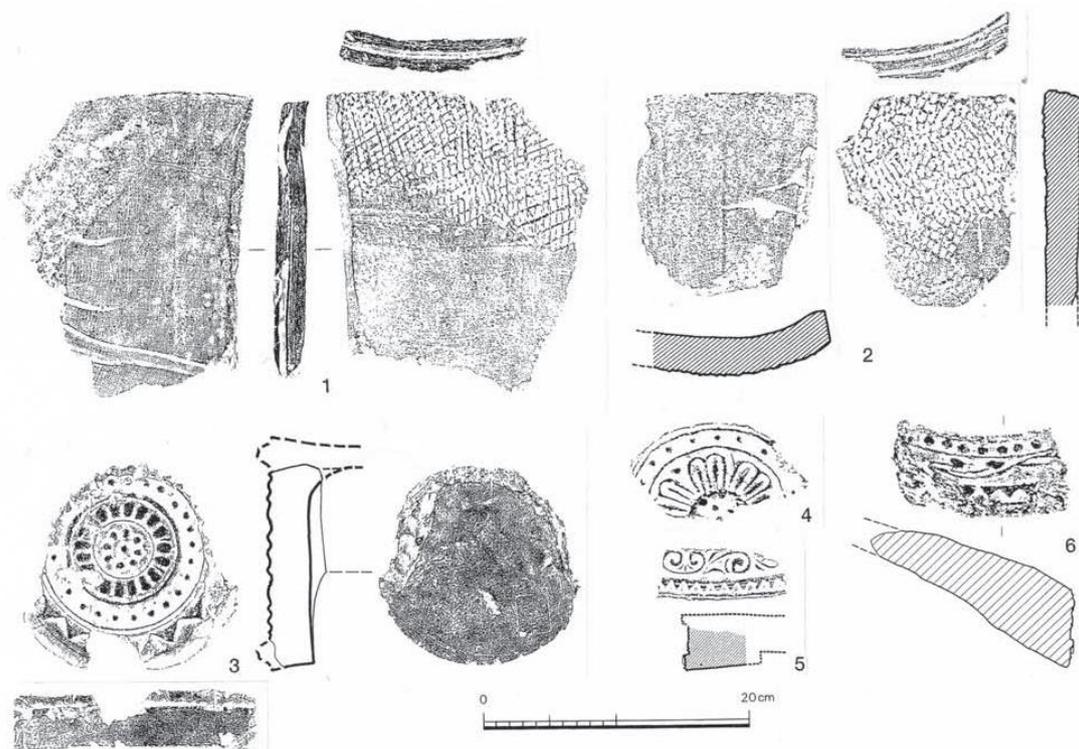


図3 豊前国府跡出土軒先瓦(1/5)

(「豊前国府跡出土軒先瓦」を参照)

要するに正方位のⅠ期遺構は、6世紀末から7世紀初頭ということ。

4：まとめ—国府と国分寺の関係—

復元されたⅢ期政庁の南辺と国分寺との距離は、グーグルマップで見るとおよそ南西に700m。国府近傍の寺だ。

国分寺は約西偏5度。これに近い国府国庁はⅡ期とⅢ期の西偏4度～9度。

Ⅱ期は8世紀中葉～9世紀中葉⇒7世紀中葉から9世紀中葉。

Ⅲ期は9世紀後葉～10世紀後葉

国府Ⅰ期(7世紀中葉以前)は正方位。

これに相当する国分寺遺構は今のところ見つからない。この時期に国分寺はなかったということか？

7世紀中葉以後に西偏で国庁と国分寺ができたということか？

だが国分寺では百済系とされる素弁8葉蓮華文軒丸瓦が出土し、国府からも百済系とされる素弁8葉蓮華文軒丸瓦とセットになる重弧文軒平瓦が出土しているので、国府と国分寺が同時期に作られたことが示されている。

このことは国分寺遺跡の中に正方位の遺構が眠っている可能性も示すものだ。

先の本堂西の F 区でほぼ東西の二条の柱列がみつかったが、これが6世紀末から7世紀初頭の正方位の国分寺の遺構の可能性が見て取れる。

国府と国分寺の関係—まとめ—

- 1：豊前国府と国分寺は6世紀末から7世紀初頭の時期に、近接した位置に、正方位で作られた。
- 2：7世紀中葉以後に、国府と国分寺は共に西偏で作り直された。現在国分寺で確認できる古代の遺構の大部分はこの時期のもの。

※どちらにしても国分寺は国府近傍の国府と一体の関係にある国府寺または国寺と見られ、その創建時期は6世紀末から7世紀初頭。したがってこの正方位の時期の寺の伽藍形式も、塔が回廊の中にある古式寺院であることは確実だ。

以上 WEB 関係の資料での考察。

国分寺の一番新しい報告書である、『史跡豊前国分寺跡 副書名：発掘調査及び環境整備事業実施報告書』1995年刊と、国府発掘報告書の中の政庁地区の最初のまとめの報告書である、『豊前国府 副書名：発掘調査概報』1995年刊と、政庁地区の御所地域の最新の報告書である、『豊前国府跡御所地区II 副書名：共同販売拠点（アンテナショップ）による地域産品等の販路開拓支援事業に係る埋蔵文化財調査報告』2015年刊を手に入れたので、再度詳しく確認してみるつもりである。

2021年4月11日